

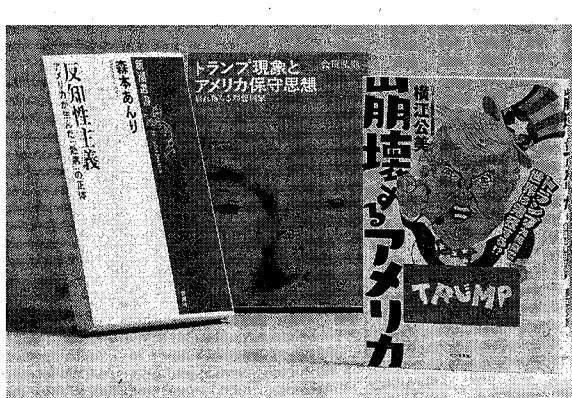
本と話題

白人中間層の怒りと不安

長い選挙戦の末、米大統領選のゴールが1週間後に迫りました。当初、泡沫扱いだったトランプが暴言のたびに支持を広げる「トランプ現象」。本選挙の結果にかかわらずアメリカの今と今後を考えさせます。

「地殻変動」

横江公美著『崩壊するアメリカ』(ビジネス社・1400円)は、いま米国では、レーガンに代表される「カウボーイの国」から、オバマに象徴される、さまざまなマイノリティー(少数者)が共生する多様化社会への地殻変動が起きていると指摘します。



横江公美著『崩壊するアメリカ』(ビジネス社・1400円)は、いま米国では、レーガンに代表される「カウボーイの国」から、オバマに象徴される、さまざまなマイノリティー(少数者)が共生する多様化社会への地殻変動が起きていると指摘します。

2000年代前半まで75%を超えていた米国の白人率は55%に低下、子ども人口では白人はすでに少数で、その変化に対応できず「多数派の地位から追い落とされる危機感」に駆られる白人層がトランプ現象の結果にかかわらずアメリカの今と今後を考えさせます。

トランプを支持。彼らが「古き良き時代」と憧れるのは黒人差別が合法で女性差別もまかり通っていた1950年代であり、トランプへの熱狂は、多様化社会への移行過程で、線香花火が燃え尽きる一瞬の光だとします。

さらに、トランプの出現で共和党の根幹であつたレーガン的思想(①小さな政府②キリスト教的価値に基づく社会政策③強大な軍事力)は終わ

りを迎えたと述べます。トランプはこの三つのどれにも同調しているとの調査結果を紹介。主な死因は自殺や物依存です。

「雇間に労働で汗を流した者は、夜、生活のことでの冷や汗を流すべきではない」というクタシングだったヘリテージ財團の上級研究員の経験を持つ著者は、強大な軍事力で「世界の警察」としてあるま

る」とも指摘されています。

差別発言がかえって

いるのです。

トネス(政治的正しさ)を重視する「エリート」層への反感があ

ることも指摘されています。

(西沢亨子)

うレーガン的外交政策は米国内で消えつつあると認識すべきだと強調します。

保険の充実、海外移転企業の呼び戻しなど、政策が心をつかむ状況が浮かびます。

この点では、森本あ

んり著『反知性主義

病』の正体』(新潮選書

・1300円)が、ア

メリカ史に繰り返し現

れる宗教的熱狂の中に

ある反エリート主義を

描きだし考えさせられ

ます。

(西沢亨子)